連結するを常規とし、左右均齊の配置を取ることは支那の邸宅と同工である。その他規模の大小に從ひ、建築物の多少とその配置に異同はあるが、寢殿の前に庭を距てゝ林泉を設けることは常套である。殿宇の內容は平安朝以來純日本式であつた。しかし之も後には型が崩れたが、結局時世の變遷に應じた譯である。之等の遺構の現存するものはないが、繪卷物や文獻に據て可なり精確に知ることが出來る。更に室町時代になれば、支那式の左右均齊の平面は消滅するのである。

寢殿造は主として公卿の住宅であつたが、之に對し、鎌倉時代に入つて武家の住宅としての主殿造の構成を見る。源頼朝が鎌倉に造つた邸宅は主殿造である。主殿造は、寢殿造の變化したるものと云ふ說と、民家の發達した型に寢殿造の一部を攝取したるものであるとの說があるが、この兩說に就ては今尙研究中である。兎に角民家卽ち田舍造と寢殿造との混合である。吉野朝より、室町前期の足利將軍の邸宅等は、寢殿造と主殿造との混合によつて出來てゐる。義滿の花の御所などは是である。

次で室町時代の中期、足利義政の頃より書院造を生じた。この書院造の發生發達の經路にも若干疑問が殘されてゐるが、主殿造から變生したと考へる方が近いやうである。書院造の大成は桃山時代で、こゝに於て俄然豪宕絢爛を極めたのである。卽ち當時の諸侯の覇を唱へたものの邸館であつて、現今その一部の遺存するものに、聚樂第、桃山城、二條城、名古屋城、等の門、書院、亭榭、茶室等があり、何れも構想と云ひ、技工と云ひ前代未聞の獨創的傑作である。

奈良平安朝の建築は豪奢であつたが古典的であり、鎌倉室町時代は禪宗の影響を受けて枯淡であり、桃山時代に至つて飛躍的に激變し、華麗絢爛たる中に突飛なる獨創を加へた建築となつた。日本民族は元來簡素を好むといふ定說は茲に至つて抹殺されたかの如くに見えるが、これは時勢の刺激に由つて昂奮作

用を興した現象であり、その根本基構に於ては毫も移動した處はないのである。即ちその第一原因は國情の變化である。室町時代に至つて民心が疲憊弛緩し、全般的に停頓を來したことは一に時の爲政者足利氏の罪であり、就中足利義滿の如き、明國より『汝を日本國王に封ず』など愚弄されて、しかも雀躍歡喜した馬鹿者あり、義政の如く風流三昧に溺耽せるものあり、地方に於ては戰亂相次ぎ、恐れ多くも皇居は荒れはてゝ、御造替の御事の如きも不可能であつた。かゝる時代に、社會人心の沈滯萎微するは當然である。この腐敗した骨と肉を一刀にして切解し得る程の不世出の英雄でなければ天下は治まらない。茲に織田信長の出現があつた。信長は彼の比叡山延曆寺の大伽藍を灰塵とし、僧兵僧徒は一人も殘らず之を殺戮した程の荒療治の名人であるが、遂に大成を見ず、豐臣秀吉に至つては、融通無礙の偉人として、權謀術數と不撓不屈の精力とを以て全國を平定したのである。その結果困憊した國民は、秀吉の一管の注射液に因て俄然復活し一種の昂奮性が勃發したのである。昔の柔弱な制度文物を片端しから破壞せんとする氣慨を示すに至つたのである。その適例は、秀吉が一躍關白に任ぜられたことである。關白職は往古より藤原氏にあらざれば任ぜられぬ恒例であつたのに、氏も素性も無い一介の尾張の農民の伜が、一躍關白とは破天荒の沙汰である。百姓出身の加藤清正・商人出身の小西行長の出世も同型であり、夕に一城落ちて城主は浪人となり、一介の浪人が旦に一城の國主となると云ふ有爲轉變の世の中にあつては、何事も腕次第である。建築に於ても亦た斯の如くでなければならぬ。隱れたる天才の大工と雖も、機を得てその手腕を示せば直ちに天下の巨匠と仰がるゝは當然である。既往の舊套を墨守する時代ではない、思ふ存分に獨創を揮ふべき氣運は來れり、とは桃山時代の建築家乃至藝術家の氣慨であつたと思はれる。

茲に一言特筆し置かねばならぬ事は、天皇尊崇の精神は、何時の世でも何人

でも、ゆめ忘れられぬ事である。前章にも擧げた如く、信長の剛岸、秀吉の磊落、家康の陰險を以てして、三人三種の異なつた性格を超越して、何れも忠勤をぬきんでゝ皇居御造營を申上げたのである。その以前に於ても、大内義隆は皇居御修復の爲御費用を獻じて居り、上杉謙信も亦た上洛して御費用を獻じ奉つて居る。率土の濱皇土に非ざるはなし、山陽北越曷ぞ區別あらんや。

扨桃山時代の建築の特色は、前時代の反動で、眞劍なる日本人の勇氣を示した生氣潑剌たるものである。而してその建築の豪華壯麗を極めたのは、時の主權者がその威力を示さんとするに因ると思ふ。而して藝術家は滿腔の熱誠を以て之に當つたのである。玆に特筆すべきは、當時邸館の建築は殆ど總て彫刻繪畫と密接に相投合し、三者相融和して始めて壯麗の美を濟してゐる事である。勿論既往の佛寺に於て、建築、彫刻、繪畫の三者が共存して殿堂の内外の美觀を大成してゐるが、それは宗教的意義から出發したのであり、桃山邸館に於けるものとは全く異なりたるものである。

桃山邸館に於ける彫刻は、多くは欄間、妻飾、蟇股、手狹、拳鼻等の細部に屬するものであり、繪畫の多くは障壁畫で、天井などにも適用されるが、要すに建築美を助長する裝飾である。然るに彫刻も繪畫も既往のものとは全然その調子を異にした獨創であり、大膽卓犖の手法に強烈濃厚なる色彩を施すもので、一歩を誤れば怪畸卑俗に陷るのであるが、當代の藝術には殆どその失敗は無い。それは作者の心理の致す所であつて、苟も獨創なくして漫りに奇を弄して人を欺くとか、巧を衒て虚名を博せんとするが如き邪心から出た製作ならば、何程精巧であつても、それは愚劣の惡作であり、若し一點の邪念なく獨創の製作に精進したものならば、假令形に不備があり技巧に缺點があつても、人をしてその清新に敬服せしむるものである。桃山時代の藝術は後者であり、前者は多く江戸時代の製作に見られる。人若し桃山藝術と江戸藝術とを對比するなら

ば、先づその心を洞察せよ、卒然之を見て美を感じ、凝視して醜を覺ゆるものは江戸に屬し、之と反對の心證を受くるものは必ず桃山に屬するものである。

桃山時代の邸館は殆ど總て書院造で、その大廣間が卽ち最高の謁見所であり、最も豪華を竭した金碧燦爛の式場であるので、最も嚴格なる楷書の建築に屬し、素より日常生活には適せざるものである。こゝに於て邸館の內に打ち寬ぐべき若干の房室が備へられねばならぬ。亭榭は卽ちこの一例である。

亭榭の定義は正確に定め難く、例へば京都の金閣銀閣の流の如きもあり、或は京都西本願寺にある聚樂第の遺構飛雲閣の如きもあり、其他種類なほ少からず。飛雲閣は豐臣秀吉の創建にかゝる聚樂第中の一宇なりしが、秀次が秀吉に代り、關白となつて聚樂に入り、秀次罪を得て自刄するに及んで聚樂は取壞され、飛雲閣は西本願寺に遷されたのである。閣は三層にて其構成の巧妙得も言はれず、內部の間取り・設備等は卽ち溫柔輕快にして行書的の風味あり、桃山獨創の名建築である。京都の鹿苑院金閣は泉池に臨みて衣笠山と相對し、樹林を伴として庭園に立つ三層閣であるが、極めて單純簡單である。しかもその手法の洗練は頗る觀るに足る。慈照寺銀閣も亦た泉池に臨む叢爾たる重層閣であるが、庭園の一點景として見るべきものである。金閣は足利義滿の創建、銀閣は同義政の建設にかゝる。

茶室は室町時代の後期に發達し、桃山時代に大成して、江戸に普及しつゝ今日に及んでゐるが、その眞隨を得たるものは桃山時代にある。茶は最澄傳敎大師が始めて支那より傳來し、次で鎌倉時代の初期、榮西が臨濟宗と共に支那より將來してより漸次に普及したが、室町時代後期に至て足利義政が茶道の開祖として茶室を設計したと言はれ、慈照寺に現存する東求堂內の一室が之である と稱せらる。その後桃山時代に入り、千利休が茶道を大成し、茶室建築はこれより勃興したのである。喫茶は、支那に於ては唐の陸羽が茶經を作つてゐるの

で、夙に喫茶の風が行はれて居たのであるが、それは單に飲料の一種として無意味に濫飲したに過ぎなかつたと思はれる。日本ではこれを精神的に玩味すべく茶道を考案し、之に關聯して茶室と云ふ特殊の建築を始めたのであつて、日本民族性の床しさの一端が見出されるのである。

茶室建築は草書建築である。日本建築の裡に於ける一種特異の建築であり、わびを旨とし、凡俗を超脱し閑寂清雅の境に入る道場である。元來一定の器械的の型はなく、作家の意匠に委せるものにて、その眞諦とする所は、當時の濃厚豪華なる邸館建築に反抗して、恬淡の裡に無限の高雅なる趣味を含ましめんとするにあると見られるのである。卽ち茶室の妙は大自然の體得にありと云ふべく、一本の柱も人工を加へざる丸木を以てし、或は皮付きのまゝを賞用し、屋根も藁や萱で葺き、垂木や天井などに竹を選ぶ等、巧を需めずして自ら巧に美を求めずして自ら美を致すのである。畢竟茶室建築の要領は、原始的建築は卽ち至高の文化建築なりといふ理想の具體化であると思ふ。至愚は至賢であり、一默は雷の如しと言ふも亦たこの類例である。

千利休が大成した茶室建築は、時と共に發展したが、その構想は逆比例に墮落したと思はれる。慽むらくは江戸時代に至つて茶室建築は崩壞の一路を辿つた。その原因の一ッは、茶道に流儀が出來た結果、器械的に儀禮の型を工作し、無用の小刀細工を試みて自ら趣味を破壞した爲に、茶道本來の純眞素朴さが失はれるに至つたが故である。

茶室建築の味は日本以外の諸民族等には到底窺窺し得ざるものである。茶道建築は日本建築中最小にして最大なるもの、最簡にして最繁なるもの、最粗にして最精なるものと稱しても誇張ではない。その言外に千萬言があると思ふ。

茶室の代表的なる實例は頗る多い。例へば京都高臺寺に殘存する傘亭、時雨亭の二あり、桃山時代の作と稱せられて居るが、これこそ眞の茶室である。そ

の他千利休の作つた山崎の妙善庵、松の尾の湘南亭、現に三井家の所有する國府津の如庵等何れも傑作である。江戸時代に下り、桂離宮内の小堀遠州作と稱する茶室を、世人は深く推奬するが、之は遠州の作ではなく、桃山時代の茶室に比較すれば、著しく見劣りするのは止むを得ぬことである。

第六節　城　郭

日本の城郭はその淵源太古に溯るのであるが、奈良時代には既に城柵が現れてゐる。城はその文字の如く土を以て成すもので、初めは所謂土壘であつた。柵も文字の如く木を以て廻らし、敵を防禦するのである。天智天皇の御代には水城がある。これは筑紫の太宰府に造られたもので、當時太宰府は三韓及び支那との外交を司り、同時に外敵防禦の本據であつた。この水城は太宰府の西北にあり、堤防を築いて水を湛へ、敵來襲せば堰を切斷して水攻にするのである。水城の遺跡は今なほ現存してゐる。

柵の遺跡として現存するものは、予の見たものでは羽後の後三年驛近くに金澤の柵がある。之は丘陵を利用して麓より三重に濠を堀り、堀つた土を内側に積上げて壘を造り、壘の上に柵を廻らし、城戸門を開き、丘の頂に邸館その他の建物があつたものである。後世ではこの濠に水を湛えたが、その以前に於ては障礙物即ち逆茂木等を用ひたのである。

斯くして城郭は、平安朝・吉野朝時代と漸次發達し、室町時代後期に至り大成に達した。即ち平城、山城、水郷等の種類はあるが、概ねその繩張即ち平面計畫は、本丸、二ノ丸、三ノ丸と三重に濠を圍らして水を湛え、濠の後側に石垣を積み、之に多門塀を廻らし、其の要所々々に櫓を築き、各重に城戸を設け

本丸即ち城の中心には天守を築いたのである。天守は普通三重より五重に至つた。天文十一年に葡萄牙より鐵砲の傳來があり、城郭建築にも一大進歩を來したのである。即ち昔の柵は土壁となり、多門塀と名づけられた。この塀に縱狹間、角狹間、鱗狹間等の銃眼を穿ちて敵を覗ひ擊したのである。

城郭が完全なる建築として發達の極に達したのは桃山時代である。信長の安土城、秀吉の大阪城及び伏見城、家康より家光に至つて完成した江戸城等の諸城は今なほその片鱗又は斷片を遺し、その最もよく保存されたものに秀吉創建の姫路城があり、天守の有名なものに名古屋城がある。

日本城郭建築の制は、元來朝鮮支那系の傳統に基くものと考へる説もあり、殊に天守の如きは歐羅巴の型に由るものと信ずる説もあるが、私は之を否定せんとするのである。即ち、天主、櫓、多門塀、城戸等は何れも日本固有の既往の建築を基礎として漸次に發達した形跡が明らかであり、支那や西洋の城とは甚しく異なるのである。試みに之を支那の城郭と比較すれば、支那に於ては、一家、一村、一都市、一國を城壁を以て取圍む慣習があり、その建築も、若干日本に似た點もあるが、大部分は似ないのである。又天守にしても、歐羅巴の城郭に日本のそれらしき規模、構造はなく、僅に明治維新前後に函館の五稜郭の如き西洋的平面の遺跡を見るに過ぎぬ。我國に於ては、桃山初期の天守の上層は木造の御殿造が普通で、何處にも西洋臭い處はなく、その多層の建築たる理由も西洋に模したのではなく、既に足利義滿の金閣は三層であり、爾來發達して、軍事建築の必要から五重に增大したものと見るのは當然であると確信する。

城郭建築は軍事建築であり、敵に對する防禦の爲であることは勿論であるが、日本の城は單にそれ丈けではない。四圍の環境に即應して形勝の地を選び建築の美觀を添へることを忘れない。現今殘存する城郭の中、その最もよく保

存された名城は播摩の姫路城であるが、一たび之を仰ぎ見れば、何人も直ちにその輪奐の美しさに魅せられるであろう。天に冲する中心の大天守の偉容、之に扈從する三基の小天守、之を圍む幾重の多門塀、その要所々々に屹立する櫓幾口の諸門、付屬の諸屋、甍を並べた堂々たる一群の諸建築は、正しく集團美の好圖をなし、その間に茂る欝乎たる老松は、諸建築の間に錯列參差して一段の風光を添えてゐるので、得も言はれぬ風情である。之を見る者は何人も劍戟相交はる血腥き修羅場の現出する所とは想像だにされぬのである。實にやものゝふは、物のあわはれを知るとかや、武道を嗜み、文藝に秀で、義勇奉公を旨とし、卑怯未練を恥とするのが武士道の面目であり、敵と惡戰して之に勝つ斗りが能でない。洵に日本の城郭建築は武士道の象徵であり、外國等には類例を見ぬ所である。これこそ日本精神の一端を發揮せる純正日本建築たる所以である。

第七節　廟　墓

廟墓とは儀飾を備へた高級の墓、即ち屍を埋める靈域の上に建てられた特殊の建築であるが、原則として墓は屍の上に立てられる標石であり、廟は墓前に設備された建築物や儀飾等を總稱するものであるが、屍なくして故人の像を殿内に安置するものもあり、又屍の無いものもある。この制も亦遠く太古に發祥し、連綿として今日に至つてゐるが、墓の方は爾來大なる變遷はなく、廟の方は時代と共に次第に發達の跡が顯著である。而して廟は往々神社に似た形式に變化したものがあり、或は佛寺に近いものもある。

廟墓の最古のものは、今日に遺る天皇、皇族等の御陵にて、之は圓墳又は前

方後圓と俗稱する双墳である。佛教渡來以後には佛塔を以て墓標とする例が行はれたが、藤原鎌足の廟墓には十三重塔が多武峯に建てられ、平安朝の頃から寶篋印塔や五輪塔が文武の高官の墓標として慣用され、その惰力が永く近代まで續いてゐる。

廟の組織の完全に調つたのは何時頃からであるかは詳知せぬが、桃山時代から俄然發達したものと考へらる。就中豐臣秀吉の廟は京都の阿彌陀ヶ峯に造られ、その遺骸は峯の頂に埋葬され、半腹に大規模の殿宇を建立し、朝廷より豐國大明神の諡號を賜つて、神社型の廟を創設したのであつた。秀吉夫妻の靈廟は京都の高臺寺にあるが、內部は蒔繪を以て裝飾されてゐる。所謂高臺寺蒔繪である。德川家康の廟は、始めは東照大權現の勅諡を賜はりて駿河の久能山に葬られ、後に東照宮と改諡されて下野の日光山に改葬されたが、明治六年に別格官幣社に轉格された。爾來三代家光の大猷院を除いて、歷代の將軍は東京の芝と上野に葬られ、廟の形に經營されたのである。これ等の建築は一見甚だ華麗であるが、實は桃山の餘弊に倣つた廢頽的建築と言ふも過言ではない。日光廟の如きは俗間で日本第一の美建築と持て囃して居た時代もあつたが、實は過度の裝飾を濫用して靡爛に陷つたものである。但しこれは剛愎なる家光が祖父家康の廟を、秀吉の豐國廟に倍蓰する程の華美なものに造るべく奉行や棟梁に嚴命した爲であると信ぜらる。

要するに大規模の廟墓は偉人貴紳等の爲に造られるが故に、その建築は多く壯麗華美を旨とするの傾向を有し、兎角過度の裝飾を施すことゝなるのは已むを得ぬ事である。世界古今の實例に徵すれば、廟墓の偉大壯麗は少しも羨むにも驚くにも足らず、古代埃及のピラミッドや、小亞細亞のマウゾロス王、羅馬のハドリアヌス王の陵墓、支那秦の始皇帝陵、明の十三陵等に比すれば、日光などは殆ど小兒の玩具にも及ばぬのである。併しこれも日本と大陸との量の比

較である。我は大陸建築の魁偉に驚き、彼は日本の纖細に愕くのである。由來支那は厚葬の國であり、西歐も古代に於て厚葬の風があつたが、それは物的の厚葬である。日本は寧ろ心的の厚葬である。

更に附記すべきは日本に於ける儒敎の廟である。これは所謂廟墓とは範疇を異にし、孔子を祭る設備であるが、奈良朝時代に吉備眞備が始めて太宰府に創建してより、永く等閑視されたが、江戸時代に入て突如として隆興し、江戸に聖堂を興してより、各地の大藩に普及されたのである。その巨擘は卽ち江戸湯島の聖堂であり、その建築は朱舜水の示唆に由る支那風の規模を參酌したものである。

第九章　結　論

第一節　日本建築の再檢討

日本の建築は日本に取つて最大重要の文化的物件の一つであり、その解說は甚だ粗雜であつたが、大要前述の通りである。

要するに日本建築は、日本の土地、民族、歷史の三脚を以て立ち、その綜合的作用に由て成立するものである。然るに多くの人は、建築を只だ木石の構築物と無造作に心得、その形を見るのみで、建築に籠る幾多の方面の問題を等閑視するのは遺憾である。遲くはない、今より日本建築の着眼點を擴張し、愼重に觀察することを要するのである。卽ち日本建築の再檢討である。

日本に於ける建築の檢討の動機は、歐米の建築が十九世紀の終りに入つて行

詰り、この行詰れる建築を新に建て直さんが爲め、新學說を唱道し始めたことに基いて、約三十年前からその尻馬に乘つて甲論乙駁を試みたるに始まるのである。卽ち歐米に於ては、構造派、歷史派、印象派、合理派、機能派等が雨後の筍の如くに簇出し、紛々として爭ふに暇なき有樣であつた。その後獨逸に國際建築を標榜する一團結が現はれ、日本に於ても早速之に迎合したので、予は之を痛烈に否認したのであつた。その後日本政府は國際聯盟を脫退し、獨逸も亦聯盟から離脫し、國際建築團の解散を命じたのであつた。由來國際と名のつくものに碌なものは無いが、建築にも國際なるものがある道理はない。歐羅巴の數ケ國の間には國際建築が成立すべき理由もあるが、日本が之に參加すべき理由は斷然無いのである。

日本に於ては明治以後第三分期覺醒時代に當り、諸外國の建築思想を檢討すべく立ち上つたが、之が爲に我が建築界が混亂を生じたのである。現今ではこれらの空論妄說は一掃され、一部の方面に僅かにその惰力を殘すに止つてゐたが、今や眞劍に日本本來の建築を檢討し、之に示唆を得て將來の建築の進むべき針路を考究せんとする雰圍氣が釀成されつゝある。洵に空谷に跫音を聽くの感がある。

第二節　日本建築の世界に於ける立場

之に就て先づ檢討すべきは、日本建築の世界に於ける立場である。日本を世界の一部としての檢討である。既に述べたる諸項に於て日歐建築を對比し、その異同の一班を述べたが、或る論者は「西洋は西洋の特色あり、日本は日本の特色があるが、その優劣は決定されぬ。これを公平無私の眼を以て判定するこ

とが先決問題であり、而して彼の長所は之を容るゝに吝ならず、彼の短所は之を捨てるに憚る處なければ、我が建築界の進歩は期して俟つべし」と云つてゐるが、之は一見甚だ適切の論の如くであるが、實は甚だ未熟の論であることは既に縷述した處である。日本は彼の長を取らんとあせりて、彼の嘲笑と輕侮を滿喫したること無かりしや、日本は我の短を捨てんとして却て善美なる傳統を失ひしこと無かりしや。人には必ず錯覺あり、短を見て長とし、長を見て短とするは尋常普通の事である。況や又眞の長は人に攝らるゝ如き安易なるものではなく、短は人に棄てらるゝが如き輕易なるものではない。

由來日本皇國は開闢以來東亞に獨立し、數千年の長き光輝ある文化を保ち、未だ曾て外國の侵略を受けず、儼として世界を睥睨するの概がある。建築も亦た之に應呼して日本獨特の性質を堅持して今日に到り、今や將に世界に飛躍せんとする機運に際會して、逡巡畏退するが如きは、思はざるの甚だしきものである。只宜しく驀直前進あるべきのみ。凡そ物腐れて然る後惡蟲之に群集し、人心弛緩して然る後妖魔之に殺到す。吾人は不動の精神を以て飽く迄我が國固有の日本建築を擁護せねばならぬ。

結局日本建築は、日本獨特の建築として、世界の建築界に異彩を放つべきである。日本建築は獨立獨行を標榜して邁進すべきであり、歐米人の一擊に憂ひ一笑に喜ぶが如き陋態は根柢より之を芟除せねばならぬ。彼等の我に對する品評の如きは、一顧に値せざる囈言として齒牙に懸けずして可なり。

第三節　東西建築の對比

遮莫歐米建築の日本浸潤は、明治初年以來茲に八十年に及ばんとし、國民の

之を禮讃する思想は深くその膏肓に入つて容易に脱却し得ぬが如き有樣である。明治の中年を過ぎるまでは、我が國民の多數は歐米建築に眩惑され、自國の建築を低劣なるものと誤認してゐたのである。日本建築の低劣ならざる所以は既に幾度か反復説明したが、玆に更に東西建築を對比してその雌雄を檢討せんとするのである。

西紀千八百七十六年（明治九年）英國のジェームス・ファーガッソンは「印度及東亞建築史」初版を刊行して世界の耳目を聳動せしめたが、彼は當時世界的建築史家として有名であつた。彼は著書の末頃に支那建築を叙述し之を評して『支那建築は建築の資格なき低劣なものである。それは不合理にして兒戯に均しき建築である、蓋し支那には哲學もなく文學も無いからである』と言つた。而してその次に、『日本は支那の糟粕を嘗めた丈けの事であるから、之を紹介し説明する迄もない』と言て日本を一蹴した。彼は全然支那を解せず、更に日本に就ては完全に盲目であつた。しかも臆面もなくかゝる文辭を弄するは、實者蛇を恐れざる痴漢である。彼の著述に由て世界の有識家、否無識者は、彼に雷同して日本を極端なる未開國と信じたのである。しかも日本の專門家は之に對して一言の抗議も試みなかつたのである。

次て千九百二十一年（大正十年）英國のバニスター・フレッチャーは、『世界比較建築史』第六版を刊行したが、その劈頭に「建築樹」と題して一圖を掲げ、世界建築の盛衰の分布を樹木に擬して一目諒然の好案を試みてゐるが、その意を檢討するに、「世界建築の初發は東洋に印度、支那（日本を含む）メソポタミアあり、西洋にペルー、メキシコあれども、皆枯凋して殘骸を下枝に遺し、次で希臘羅馬を始めとして近代に至る迄漸次に枝葉が繁茂して全世界を覆ふに至り、現代に至つては、米國を盟主とする所謂モダン建築が榮へて居る」といふ見解であるが、何ぞ米國に媚びて日本支那を輕侮するの甚しきや、しか

も彼の著作は世界の隅々に迄普及せられ、日本に於ても苟も建築家又は建築に趣味を有する者は殆ど之を購讀して居りながら、彼の盲目無知にして東亞建築を知らざるを摘發した者は無いのであつた。加之、昭和の初期に至つても、歐土の權威として定評ある識者の中にも、「日本に文化ありや、日本文化は支那の模倣に非ずや」と喝破しに者があるではないか。

斯の如く歐米系の諸國は、現時に於てもなほ日本を野蠻國と認め、その建築も當然建築と稱するに足らざる低級劣惡の原始的小屋と確信してゐるのである。

予輩が今更歐米人の殆ど全部が日本建築を知らざるを痛嘆してもその甲斐は無い。漫りに歐米建築の模倣を痛擊しても、その効果は果して幾何ぞ。只だ本稿の終結として、氷炭相容れざる東西文化、その一部の東西建築の根本の性質を列擧し、その善惡優劣を批判すべき參考の一端として玆に提供するのである。

	日本	歐米
根本原理	義情心 陰忍・謙讓	利理物 無遠慮・傲慢
生活樣式	坐禮 夏向き 開放的	立禮 冬向き 密閉的
建築の構成	質の良 靜の態度 精細の工作 無表情の如し 簡素の手法 清雅の趣味	量の多 動の姿勢 粗大の工作 表情の充溢 煩縟の手法 猥雜の趣味
技巧の原理	自然に同化 手工の妙 非寫實的圖案 自在畫的意匠	自然に反抗 器械工作に妙 寫實的圖案 用器畫的意匠

る。

第四節　將來の日本建築

併しながら我々が啻に既往の建築の美しい特性とその優良な形態のみを誇り、現代の建築のなほ過渡期にあることを理由として、その混沌狀態を傍觀せんとするならば不徹底の譏を免れぬであらう。玆に將來の日本建築の針路を確立し、具體的にその案件を示さざれば何人も首肯せざるべきことゝ思ふ。

日本將來の建築に對する論議は、區々として統一されて居らぬ狀態にある。玆に想起するのは、今を距る四十年の昔、建築學會に於て、「日本將來の建築」といふ課題の下に討論を試みた時、議論は二派に分れ、甲は「ゴシックの樣式」を主張し、乙は「ルネサンスの樣式」を支持したが、多數決に由て「ルネサンス」に歸着したのであつた。今より之を見れば實に隔世の感に堪へぬ。當時は建築卽樣式と心得て居たもので、しかも建築とは歐米の建築の謂で、その他諸國の建築は建築と認めざるが如き態度であつたのである。次で三十餘年の昔、建築學會に於て再び「日本建築の將來を如何」といふ課題の下に討論會を開催したが、議論百出紛々たる裡に、やゝ條理の通つた意見を吐いた者が四人あつた。その第一は三橋四郎君の折衷論で、それは西洋建築と日本建築との長所を折衷して、完美なる樣式を大成すべしと言ふのであり、第二は長野宇平次君の歐化論で、日本建築は到底歐米に比肩すべきものに非ざるが故に、寧ろ歐米に倣ふに若かずと主張し、第三の關野貞君は獨創論で、既往の日本建築も現時の歐米建築も取るに足らざるが故に、玆に斬然獨創の新建築を樹立すべしと言ふのであつた。第四は予の進化論で、その趣旨は、凡そ世界の建築は進化の原則に從つて發達する、歐米の現時の建築も、太古の木造より進化したのである。

日本建築も木造より出發し今なほ木造を以て徹底してゐるが、遠き將來に於て進化して歐米とはその徑路を異にする獨特の新建築に到達すべきものであると言ふのであつた。別に佐野利器君のコンクリート論があつた。それは、木造建築の缺點を擧げ、將來の日本建築をして悉く耐震耐火たるコンクリート造建築に統一せざるべからず、既往に於て効果的なりし傳統も、現代に於て不都合ならば、之を廢棄せざるべからずと言ふのであつた。

この討論會は建築家以外の人々も參觀傍聽したのであるが、この四つの主張も悉く惡評を以て酬ひられたのである。第一の折衷論は不得要領にして頗る曖昧なりとして一蹴され、第二の歐化論に至つては、日本人として洵に不甲斐なき了簡であると罵倒され、第三の獨創論は、無より有を造らんとする空論であると嘲笑され、第四の進化論は學究的の迂論に過ぎない、目下倥偬の世の中で遠い將來を考へるなどは時勢を知らぬものであると冷笑されたのである。

その後この種の討論會は無いが、各方面で研究會や談話會が開催され、建築界は決してこの問題を等閑視して居らぬのである。要するに建築の體形は何時誰が創案したといふ事なく、國情卽ち國民生活や思想に餘儀なくされて變遷して行くのである。建築有つて然る後國民が之に追從するに非ず、國民有つて然る後建築が之に追從するのである。然らば將來の建築は將來の國民の要求に卽應すべきものである。要するに建築は一片の理窟で動かし難いのである。

茲に偉大なる建築家あり、自家の獨創を以て善美なる建築を案出し、之を以て全土の各種の建築を統制せんとするが如きは到底不可能である。これ建築の職域に應ずる變化の必要を解せざるものである。例へば大都市の公共建築、一般住宅、地方の農家、社寺等々の建築は、各々その特殊の條件に應じてその構成を異にすべきものであり、而してこの變化に由て千紫萬紅の美を現はし、燦然として文化の光明を放つのである。只だこの各種各樣の建築が、一齊に日本

的精神、日本的意匠、日本的技巧を以て統一されることが根本條件である。

若し各種各樣の建築が、眞に日本精神に由て立案され、實施されるならば、その枝葉末梢は深く問ふに及ばぬのである。その材料が木材でもコンクリートでも、石でも煉瓦でも、建築物に應じて選べば足る。その構成は純日本式でも漢趣味を加へても、歐米趣味を交へても、物に適し事に應ずればよいのである。只だ絶對の條件は日本精神を以て之を處理することである。然らば若干の歐臭ありと雖も日本の日本建築であり、多大の漢式を加ふと雖も日本の日本建築である。

要するに將來の日本建築は、將來の日本國民精神と思想に由る創建である。その樣式は求めずして自ら成立するのである。

然るに茲に又一つの問題がある。それは、建築の半面は科學であり、他の半面は藝術であるが、科學には國境が無い、即ち博く世界の建築科學を檢討してその優れる所を納れ、藝術的方面に於て日本趣味を發揮するの方針を取るならば、蓋し理想的であらうと言ふのである。併しこの說には大なる錯覺があると思ふ。科學に國境無しとは、既に遠き昔に於て唱道されたが、十餘年以前からこの考へ方は一變し、科學に國境ありと斷定されて居るのである。即ち日本の科學は歐米の科學ではない。況んや歐米の科學は日本の科學に優るものではない。吾人は諸外國の建築を見て、風馬牛相關せずの態度を持して可なり。

第五節　南亞地方の建築に就て

最後に附して置きたいのは、我が新領土並に大東亞圈內に屬する南亞地方の建築に關する問題である。勿論片言隻語を以てこの大問題を取扱ふことは出來

ぬが、試にその要點の一部を擧げる。

南方とは印度及び印度支那からインドネシア方面に亙る總稱と認めるが、その土地、住民、歴史の三つは、日本とは大いに異るのであつて、我が同胞が今後南亞地方に進出すること益々多きに及び、爰に考慮すべきは南地に於ける邦人の生活樣式であり、就中住家は最も重要であると思ふ。

南地に對する種々の問題に就ては、目下各界の學者が各々これが研究に當つてゐるのであるが、理論的研究が出來ても實際には行はれぬ場合もあり、餘程愼重に警戒すべき必要があるのである。南亞の廣大な地方の、氣候、風土、物資等は若干の差異はあるが、大體に於て一括して一つの範疇に入れることが出來る。この地方の常夏の氣候、風雨の常態、太陽の日射、自然の提供する建築材料等は、日本內地に比して相當の差異があるのである。鄕に入りては鄕に從ふの金言は永久の眞理であるから、南地に純日本的建築を與すことは無理であり、第一に地理とその環境を考究して、之に卽すべき考案を立てることが賢明である。但し注意すべきは、こゝに於ても日本精神を根柢として、その風格を建築の上に表現すべき事と、衞生に注意して健康を保つことであり、既往に於て英米人が經營せる如き誤つた建築の轍を履まざることである。

南地の酷暑は人の頭腦に及ぼす影響の大なるものがあり、今後移住の日本人は極力警戒して之を避けねばならぬ。例へば印度人の大多數は、インド・アーリヤ民族で、元來歐羅巴人と同系統に屬する。太古に於て同一系の民族が、一方は歐羅巴へ一方は印度に移動し來り、印度へ來た方は結局英國に征服されたのは、恰かも英國は虎となり、印度は猫となり、虎が同系の猫を喰つた樣なものである。虎になるべきものが猫になつたのは、五千年來の苛酷なる氣候風土に曝らされた爲である。

酷熱は人の腦を侵すものである。印度地方は、四季の氣候に殆ど變化なき爲

頭腦の働きも鈍くなり、食物は手近に野生の米穀蔬菜が豐富であり、無爲徒食の安易に慣れて、結局懶惰に陷るのである。勿論古代に於ては偉人も出で、優れた文化もあつたのであるが、時と共に退化して今日に至つたのである。印度に派遣される英國の官吏軍人は三年毎に更替させられてゐるのを見ても、人體に及ぼす酷暑の影響の如何に甚大なるかを想像せしむる。これは獨り印度のみでなく、熱帶地方の通有の現象である。

この理由を知らざる大多數の歐人等は、口を開けば熱帶諸國は悉く亡國なり、その民族は悉く低級の野蠻人なりと言ふ。憐むべきは熱帶地の民衆なるが更に憐むべきは歐米が同系の民族を喰つて自己の腹を肥やさんとする蒙昧野蠻の惡習である。

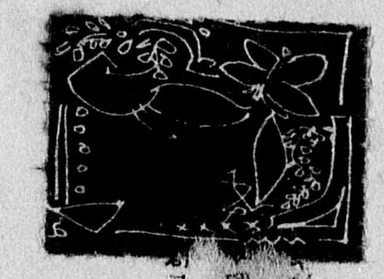
太古より中世紀に至る世界の赫々たる文化は東亞に在り。極西にアラビア、南方に印度、東方に支那及日本がある。當時混沌たる西歐の蠻族等はこれ等東方文化の恩惠を受けて近古以來大に發展したのである。この明瞭なる事實を知らざるは、畢竟目前の利害を見て、既往の歷史を顧みず、將來の世界を考へざるが爲である。怕るべきは彼の兇暴に非ずしてその無知である。

溫帶又は準寒帶人が熱帶圏に移住すれば、必ず低腦に陷るは當然の事實とすれば、我等の同胞も亦たこの禍を受けざるべからざるか、否、請ふ深く憂ふること勿れ。日本民族は元來南方系、大陸系、北方系の三系の融和であることは今や動かすべからざる定說であり、吾人の贅言を待たざる處である。卽ち日本民族は熱地に在りても寒地に在りても、よく之に耐へ得べき天賦の資性を有するのである。この資性を善用せば、世界到る處に活步して毫も憂ふる所なかるべきを確信するのである。

第六節　結　語

日本建築の實相の闡明は、日本建築學の出發點でもあり、又最終點でもあると考へられ、之を鑽れば愈々堅く、之を鑿てば益々深く、之を究め盡すことは到底予輩の能くするところでない。結局予は、建築は啻に個人の建築の爲の建築ではなく、社會の爲國家の爲の建築でなければならぬと思ふ。社會に益なく國家に害ある建築は、外貌善美と雖も實は世を賊するものである。今試に敢て所信の一端を述べたのであるが、叙事蕪雜、言辭粗笨、自ら顧みて頗る忸怩たるものがある。玆に姑らく筆を投じて江湖諸彦の高評と叱正を俟つのである。

日本建築の實相
出版會承認ろ一五〇〇一三

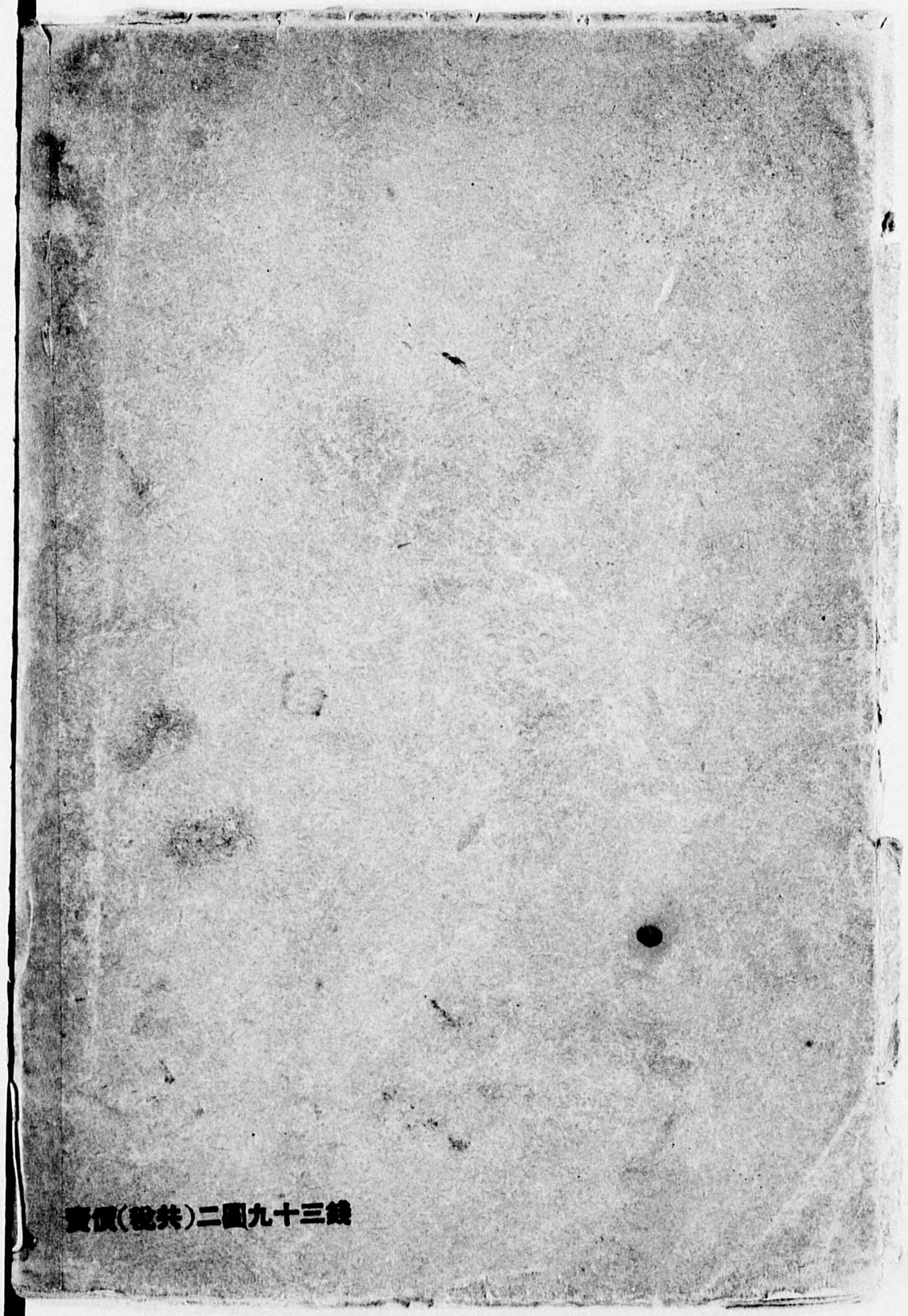


昭和十九年九月十五日印刷
昭和十九年九月二十日發行　（三、〇〇〇部）
定價（特別行爲稅相當額）二圓八十錢　十三錢　合計二圓九十三錢
著者　伊東忠太　東京都麴町區内幸町二ノ一
發行者　金原健兒　東京都芝區愛宕町二ノ一
印刷者　川口芳太郎　東京都芝區愛宕町二ノ一四
印刷所　帝國印刷株式會社　東京八六
發行所　株式會社　新太陽社　東京都麴町區内幸町二ノ一大阪ビル
會員番號一一二五八五　電話（銀座）一一九二四　三八—九　振替東京七五一六二
印刷　元　日本出版配給株式會社（東京都神田區淡路町二ノ九）　藤澤製本

1002
9
521
I 89
2

414

19年10月4日

國學院

終